



2008年

**SORA** 22号

晴  
夜

(22)

— 1

柴 田 佐知子

海人族に道は自在や黄砂来る

山羊の子のふんばつてゐる春岬

歪みつつ伸ぶる旧道あたたかし

黒髪の縷々と雛の真夜中は  
貌つぶし合ひて子猫の眠りをり

人間を沈めて白し花の山

鬼がゐて鬼の子がゐて春の月

―「W E P」俳句通信四十三号より―

ほとほとと母の散歩や水温む

草餅の湿りに袋歪みたる

立 夏

高 倉 和 子

御開帳ほこりも少し出でにけり

青空を濡らしてゐたる磯遊び

あいさつの前に名を呼ぶ花なづな

鳥帰る大きく空をしならせて

最後まで顔のわからず春の夢

花ばかり見てみて鬱となりにけり



砂浜に金色の筋五月来る

車椅子押しして立夏の水族館

声揃へバトン練習桜の実

だんだんと強くなりたる草の笛

麦秋や仰ぎ見ること多きころ

五月憂し母は柱に凭りしまま

鵜を囃すほどの白波立ちにけり

壺焼や父は遅れて笑ひたる

紫陽花の大きく揺るる母郷かな

先日、夜中にパソコンに向かっていて、急に爪が伸びているのが気になり爪を切った。しんと静まり返った部屋の中に爪を切る音がやけに大きく響く。そういえば夜に爪を切ると親の死に目に会えないと言っていたことを思い出す。迷信とわかっていても急に心細くなる。

子供の頃信じていたのは夜、口笛を吹くとお化けが出るということ。他にどんな迷信があるのか気になり、ネットで調べてみる。しゃっくりが百回出ると死ぬ、酔を飲むと体が柔らかくなる、牛乳を飲むと胸が膨らむなどなど。他にも西洋の迷信もあってどれも面白い。原稿が進まないといふ余計なことばかりしてしまふ。悪い癖である。

陽  
炎

中田みなみ

或る日蝶入つてゆけり果実店

啓蟄や東京ロボット研究所

菱餅の反りてカナリヤ長鳴けり

園丁が電話かけをり地虫出づ

ねんいりに犬の毛を梳く合格子

春芝居運河貫く町に來し

・撒骨・

私人としては以前から海への撒骨に憧れているのだが、いよいよ直面すると、一族の意見もあり、関東地方は三浦岬前方という指定があり、船も好みで選べぬと聞き、どうも思い通りにはゆかぬものらしい。

昔、駐日大使として活躍された故ライ



ポスターの女形流し目燕くる

神棚にのせる祝儀や花の雨

春障子膝に白絹広げたり

夫逝く

見えざりし海のひびけるさくらかな

七七忌楓の花に気づきもし

花冷や石工が磨く黒御影石

いのちいつまで陽炎が前うしろ

青き踏むけふのこのみ考へて

籠枕隙間より夢抜けにけり

シャワー氏のハル夫人の手記の中に、「一族友人が浜辺の庭に集っていると、ヘルコプターがゆっくり何度も旋回し、やがて海へ撒骨しつつ、消えて行った。」というのを読み懂れたのであった。

又、二十年程前、句友達と五島列島を一と巡り吟行したことがあったが、私の一番好きなのは堂崎教会で、庭に使徒の像と並んで『愛はちから』という碑があり、暫し仰いで動けなかった。この裏の花野を歩くと断崖に出る。此処こそ希みの撒骨場所とばかり、紺碧の海を見下ろしていると、寄って来た村人が、「この辺は大蛸が釣れてねエー」と話し掛けて来た。あのゴムホースのような口で吸われるのは情ない。イルカなら許せるが、鯨や虎魚も厭だ。そんな光景をいろいろ連想していたら、一句出来た。

骨撒きし辺りで釣れし桜鯛　みなみ

# 空作品評

柴田佐知子

に歩くことも言う。「けふのこののみ考えて」の措辞によって見えてくるのは、春の野にあって、心は奥へ奥へと深まる作者の一步一步の歩みである。この一步一步に私は底流する悲の響きを感じる。

灯台まぶしやどかり次の巻貝へ 服部 早苗

ぶれない至って即物的な把握である。視線は白い灯台から一気に目の前のやどかりへと収斂される。その小さなやどかりが、小さくなった貝を捨てて次の巻貝へとすると宿替え。視線の動きと小さな命の営みとが、夾雑物を交えずすっきりと詠みとめられている。

夏休み最後の日まで叱られて 小林 朱夏

草いきれや蝉しぐれとともに思い出す夏休み。そういえば、毎日何かで叱られて過ぎていった気がする。夏休みの宿題も終わっていない最後の日はことに。「最後の日まで」の措辞を得たことで言葉が流れずに鮮度も増した。

花吹雪く菩薩も夜叉も身の内に 苑 実耶

人間だれもが持つ真実の一面であろう。心象を詠

御開帳ほこりも少し出でにけり 高倉 和子

春になると、日頃は眼に触れることがない秘仏の扉を開いて拝ませる「御開帳」が各地の寺々で行われる。さて掲句、扉が開かれ久々に秘仏がお出ましになるありがたい時に、秘仏と共に「ほこりも少し出でにけり」…なのだ。真正面からすこし離れた作者の視線が面白い。ほんわかとした、どこかとぼけた味わいのある楽しい作品。

青き踏むけふのこののみ考へて 中田みなみ

「踏青」はもともと陰暦三月三日に野へ出て萌え出た草を踏み宴を催す唐の行事を言うが、その日に限らず春の青草を踏み遊ぶ、あるいはただそぞろ



みながら、この句からは絢爛たる絵巻のごとき印象を受ける。「花吹雪く」という言葉の斡旋が句に絵画的な美を呼び込んだのだと思う。

打つほどに退る木魚や山笑ふ 青山 悠

木魚を叩いたことがあれば分かるであろう。打ち続けているうちに、次第に位置がずれて向うへいつてしまうのである。ずれていった木魚を自分の方へ引き寄せながら拌み続ける人を見たこともある。「打つほどに退る」がうまい。そして可笑しい。何でも俳句になるものだ。山々が芽吹きはじめた頃ののどかな寸景である。

どんたくの人出も雲も沸き立ちぬ 秋 千晴

今年もどんたくは大層な賑わいであった。「人出も」までは常識的であるが、「雲も沸き立ちぬ」によって独自性が加わった。どんたくの熱気渦巻く博多の街がまさに沸き立ってくる。

畦焼いて幽霊花を咲かせます 吉村 摂護

三橋鷹女を思わせるこの句を句会で見たとき、勝

手に女性の句と思ったので、「摂護」との野太い名をのりを聞いた時には少し驚いた。季語は「畦焼く」。火を放った畦は、秋になると真赤な曼珠沙華に染まるのである。現実と幻視の交錯のはざ間に異空間が玄出する。彼岸花ではなく幽霊花という言葉を選択した感覚の冴えが光る。私は基本的には俳句という詩形は、その短さ故に文語の方が力を発揮できると考えている。しかし、この句の場合は「咲かせます」という口語表現が絶妙の効果を上げており動かせない。

綿菓子にかくれてゐたり春の雷 堀江 恵子

夏の激しい雷と異なり、春雷は啓蟄のころに遠く  
の空で低く鳴る。私は春雷と思わず声にしたあと、  
ああ春だなあと思う。恵子さんの直感が導きだした  
措辞が「綿菓子にかくれてゐたり」である。メルヘ  
ンチックな仕上がりが楽しい。春の雷であれば、そ  
うかもしれないと納得させられる。へあえかなる薔  
薇撰りをれば春の雷 石田波郷に通う華やぎもあ  
る。

ぼたん咲く母在りし頃のはらからよ 桜 三奈子

重心を下五の「はらからよ」に置いているが、母を恋う思いが溢れている。ただ居るだけで安らぎと満ち足りた時を与えてくれるのが母という存在と思う。その母を芯にして兄弟がいたころ。それはもう戻ってこない情景なのだ。遙かなる時への遠眼差しのごとき、しみじみとした母恋いの句である。

すこし夢また少し夢雪間草

織田 高暢

へみんな夢雪割草が咲いたのね三 橋鷹女」という有名な句があるが、あえて兆戦したところが面白い。春の光の中で雪が溶け出し、ところどころ現れた土に萌え始めた草を雪間草という。長い冬から解き放たれたような雪の隙間の芽吹きが、独自の調べで表現されている。

花吹雪少年遠くに基地を置き

及川木栄子

少年期の青い時間が句の後ろにひろがってくる。みずみずしい情感が流れる作品である。

梅咲くや山へと返す山の畑

山田 正子

過疎化が進む農村であろうか。人手を離れた農地はたちまちに野へと戻ってゆく。「山へと返す」と

の措辞が的確である。

夏来るとTシャツの胸主張せり 南 シズ子

健康的な若さが漲っている。「主張せり」という生硬な表現が、この句の場合は上五からの勢いを増幅させ力強く生きている。シズ子さんは今号が初投句である。

初めより銀杏の形に芽吹きけり 中条さゆり  
餅の花瑞穂国に枝垂れけり 鳳 蛮華  
日脚伸ぶいろがみ足して万華鏡 萩 悠子  
鯛焼の肩を並べてパーティーへ 今井 春生  
梵鐘の音の溶けゆく春の暮 森 裕子  
八十八夜水鏡より鯉跳ねて 永原 朱  
百合の香に覚めて佳き日と思ひけり 葉山 美香  
強気の子春一番が連れてくる 片田 きく

的確な写生句。古代まで遡るスケールを持った句などそのほか触れたかった作品である。

# 空集

柴田佐知子選

凍ゆるむ谿に瀬音を高めつつ  
日溜りへ日溜りへ人梅の花  
石をもて囲ふ方尺名草の芽  
辞書重しこの頃重し烏雲に  
母といふ役に生かされ青き踏む  
地を鎮むる祝詞の声も東風の中  
髪染めて春の一事を処しにけり  
春秋の身を励ますは声立てず  
茄子苗を買ふ幸せを買ふやうに  
大枯野踏切一つ抱いてゐる  
湯豆腐や死を忘れたる嫗たち  
壱岐白く玄界昏き颯風  
雲仙や石築き上げて畑を打つ  
山間を押し開きくる黄沙かな

行橋 安武 晨子しんこ  
福岡 吉村 撰護しゅうご

啄木忌日永の磯の砂が鳴く  
上り築活断層に槌の音

蛙焼いて幽霊花を咲かせます

御裳裾町・阿弥陀寺町春かすみ

福岡

中条ちゆうじょうさゆり

猫の恋一途といふはうとましき

白魚売り大・中・小と枅替ふる

白魚の生簀まで板しなはせて

天の邪鬼踏まるる声や春の闇

初めより銀杏の形に芽吹きけり

地震の地に帰島始まるさくらかな

遠足の名島門よりあふれ来し

綿菓子にかくれてゐたり春の雷

大阪

堀江恵子

忘れ梯子ぽつんと猫に恋のとき

雁帰る道頓堀に空残し